

ダルマ王の在位年次について

佐藤 長

【要約】 チベットのダルマ王の存在はチベット仏教史上重要な位置を占めているが、その在位年次は従来諸説紛々として帰するところがなかつた。その原因は中国、チベット両国の文献のこれに関する記載が不一致なところから来ている。しかし中国文献を仔細に検討すると、実は補国史の誤つた記述が新唐書、資治通鑑に採用され、それがチベット側文献にそのまま導入されたために混乱が起つたのである。ダルマ王の在位年次は八四一—八四六年とするのが正しく、有名な彼の廃仏は八四三年と見なすべきである。又ダルマが本質的に暴君であるとする従来の説も甚だ疑わしいことを注意しておきたい。

一

紀元七世紀の初頭にソンツェンガムボ *Sron gnam* *po* によって開創された古代チベット王国は八世紀の中頃にはダルマ王 *Dar ma* *^* *dharma* の死とともに崩壊し、世界の分裂割拠の状況が展開されることになる。チベット伝承によれば、ダルマ王は反仏主義者で仏教を弾圧したために仏僧ラルン・ペルギドルジ *Phal lun* *Dpal gyi rdo rje* によって暗殺されたという。チベット仏教史上からはこの

王の前の時代を前期弘通 *shon dar* と呼び、後のそれを後期弘通 *Phyi dar* と呼んでいる。従つてダルマ王はチベット仏教史では文字通りエポックメーカーキングな存在であるに拘らず、その在位年代については諸学者の間で説は一定せず、未だにチベット史上上の難問の一つとなっている。試みに最近の諸氏の説を挙げると次のごとくである。

一、ベテック 八三六—八四二年 (SCL. pp. 81, 82)

二、トマツチ 一八四二又は八四六年 (TTK. p. 42, TPS. p. 3)

三、青木文教 八四一—一九〇一年 (SETI. pp. 51, 68)

四、中根千枝 八三六—八四一年 (年代基準一八九頁)

五、リチャードスン 八四一—短期間 (IR. pp. 68, 73)

諸氏の間でこのような説の相違のあるのはその拠って用いた史料とともにそれに対する批判の仕方が異っているためであるが、殊に後者三氏に不一致があるのは、年代論を正面から取上げた研究であるだけに奇異の感に打たれざるを得ない。この問題に関しては、曾て私も先学の驥尾に付して、中根氏と同様の説を出した。しかし現在ではこれらの説は、私のものも含めて皆誤っており、実は八四一—八四六年の在位と考えるのが最も妥当であるとの見解に到達した。ここに私見を述べて大方の批判を請いたいと思うが、尤も本来なれば、右の諸説を批判した上で自らの見解を述べべきであろう。しかし今はそれを略し、必要に応じて他説に言及することとする。

さてダルマ王の在位年次の決定は、それ自体としても必要なことであるが、彼の歿後アティシヤ Atiṣya が一〇四二年に入蔵して中央チベットの仏教を復興するまでの間、チベット史は殆ど空白であり、この間の事件及びその年代

を如何に配置するかということからも是非明かにしておかなければならないのである。この問題はレーリッヒ氏 George N. Roerich がテブゴンの英訳、注釈を作成するに当り、テブゴンがこの期間内に、干支による六十週年を一回脱落していることに気付き、反って問題を一層困難なものにした。というのは従来史料の不足のため、この期間を若干の事件で繋ぐのさえ困難なのに、更にそれが六十年を増してくるとそれらの僅の事件は一層引伸ばされて巧にリンクしなければならぬという作業を背負うことになるからである。勿論レーリッヒ氏は自らその空白を埋めるための年代、事件の配列等を種々考えてはいるが、しかしそれはテブゴン内部での解決であり、歴史上の事実決定にはなっていない。青木、中根両氏の研究は、この問題を史実として解決しようとしたものであるが、リチャードスン氏 H. E. Richardson の研究も同様な目的の下に書かれ、特に後半は、青木氏のダルマに関する年代論の相当詳細な批判になっている。

今ここでダルマの死からアティシヤの入蔵までの空白を埋めることは当面の目的ではないので省くが、ダルマの在

位年次を明かにすることは解決の発端を作ることにもなるので、この際是非確定しておかなければならないのである。

ところで従来この問題研究に使用された文献はチベット側では種々のチョエジュン類、中国側では両唐書、通鑑の類であった。特に中国文献は一般的にいえば係年が正確であるため、その重要性が充分認められていたが、実はこの場合に限って諸書の間不一致があり、更にそれはチベット側のチョエジュン類の年代と一致しないために、解決を一層困難なものにしていた。しかし実は私見によれば、漢文献の不一致は或る一史料の紛込みのために起されており、それを整理すれば、權威あるチョエジュン類の伝承とは全く一致して矛盾なく解釈できるようである。

叙述の都合上、先ずチベット側でどのような紀年があるかということから述べてみよう。既にリチャードスン氏が注意したごとく、チベット側の伝承には二つある。一つはテブゴンのそれであり、一つは他のチョエジュン類のそれである (TIR. p. 67)。

第一にテブゴンであるが、この書はカリカツツ Kha hi Kha tsu 即ちチツクデツェンレーバチェン Khri gtsung

lde brtsan Rai pa can の死と後継者のダルマの即位を八三六年に係け (BA. p. 52) ①、ダルマは辛酉の年即ち八四一年に歿したとする (BA. p. 53) ②。従来はテブゴンが、一般に紀年について特に詳しく記しているもので、この紀年も頗る価値あるものとされてきた。しかしテブゴン自身が断つていごとく、これら古代の諸王に関する紀年は、中国文献の系統を引いたウラン史の記載によっているのであり、チベット本来の伝承ではない。従つてここではテブゴンの紀年の史料的价值は意味ないものとして取上げることが止めた。

第二にその他のチョエジュン類であるが、それらはラグパギェンツェン Grags pa rgyal mtshan ③ からスムパケンポ Sun pa mkhan po に至るまで一致して、ダルマの廃仏を辛酉の年に係けてゐる (TIR. p. 67) ④。この辛酉の年が八四一年であることは諸学者の間で意見は一致して動かない。しかしその即位及び死に関しては干支を記さないものが多く、甚しきはチツクデツェンの死、ダルマの即位及び廃仏がすべて辛酉の年一年間に行われたごとく記しているものもある。そこでどのチョエジュンの記載が最も信頼に

価するかということになるが、私はこの際ケーパーガトンを取上げたい。

ケーパーガトンは一五五七年にカルマバのパーウォ派活仏パーウォツグラレンワ Dpar bo gsung lag hphren ba によって編纂されたが、その中には生の史料をそのまま引いたところが多く、又文献を参考にした場合も引用は慎重で、必ず典拠を明かにしている^⑤。尤も特に引用したことを断っていない部分もあることはある。しかしそれは諸書の間に不一致のないために、客観的事実として特にパーウォ自身が説明する必要を認めなかったものである。而して我がここに参考に資するもののような一般的な史料の価値からではなく、実は当面の問題に関するケーパーガトンの紀年が優れて確実な文献によっているからである。

彼は次のごとくいう (PT. ja, p. 137 a)。

チレー Khri ral が生れ給える三年前の癸未の年にチダルマウ
ドムツェン Khri dar ma u dum bisan は生れ給えり……
三十九歳辛酉の年に王位に即かれたり。

チレーはチレーパチェン Khri ral pa can 即ちチツク
デツェンであり、その生年は、ケーパーガトンでは丙戌の

年(八〇六)である (PT. ja, p. 131 a)。ダルマはその兄として癸未の年に生れたというから、この年は当然八〇三年になる。従って彼が三十九歳で即位したという辛酉の年は必然的に八四一年となるであろう。

又いう (PT. ja, p. 139 a)。

ツェンボ、ランダルマ Gian dar ma は王位に六年在り。四十
四歳丙寅の年に逝かれたり……とロギェエチェンモ Lo rgye
chen mo に述べられてあり。

八四一年から六年王位に在り、丙寅の年に歿したとすれば、それは八四六年(会昌六年)となる。この場合パーウォはその紀年をロギェエチェンモ(大史)から得たことを明記しているが、ロギェエチェンモとは一体如何なる文献であろうか。

パーウォはケーパーガトンの ja の部の最後に自らがチ
ベット古代史を構成するのに利用した文献を約十種程挙げ
ている。而して幸なことにはその十種のうちにこのロギェ
エチェンモの名もあるのである (PT. ja, p. 154 b)。

クトン・ツォンルイユンドゥンのロギェエチェンモ又はロノン
チェンモと称せられるもの。

Khu ston Britson ggrus g-yun drun gi lo rgyus chen
mohan log non chen mor grags pa/
これによってロギューエチエンモはクトンの著作であるこ
とが分るが、この著者こそはジューウオセンン Jo bo Se
btsum の高弟で、曾てロムトーン Hbrum ston とともにチ
ティシヤをガリー Mnar his に迎えに行き(BA. pp. 88, 93)
後にアティシヤにも親しく教を受けたクトン・ツォンルイ
ユンドゥン^①(一〇二一—一〇七五)に相違ない。彼はドゥメル
Grunmer によって創設されたソェルナグ・タンボチェ Sol
nag Thah po che の寺院に入り、ここで般若波羅蜜を講

説し、弟子の数を増大したというから(BA. p. 93) 相当の
学者であつたのであろう。彼が僧院長となつたかどうかは
明記がないが、彼の死後は直にオンボ・ジューンネーギエン
シィン Dbon po Hbyun gnas rgyal mtshan が確実に
僧院長になつてゐるから、多分彼もその職にあつたものと
考えられる。後継者がオンボ(甥)と呼ばれてゐるのがそ
れを暗示してゐるであらう。とにかく彼がかなりの学識を
持つたラマであり、その生きていた時代が、従来のチュー
エジューンの作者の誰よりもダルマの在世に近いことを思えば、

ロギューエチエンモの記載は相当貴重なものとしなければな
らぬ。況してケーパーガトンはダルマの二子の系統及びそ
の両派に分れての抗争をすべて年代入りで述べてゐるが
(PT. ja. 139a-140b)、それもこの書からの引用であるにお
しておやである^②。

ここに我々は、チベット側において最も古く、最も権威
のある年代を獲得することができた。即ちダルマは、

八〇三年(貞元十九年)に生れ、

八四一年(会昌元年)に即位し、

八四六年(会昌六年)に死した、

というのである。この年次が果して中国側の文献と一致す
るかどうか。

二

漢文献のうちでこれに関し最もよく用ゐられるのは兩伝
及び通鑑であるから、次にこれらの三書の記載を掲げよう。

一、旧伝

会昌二年、贊普卒、十二月遣論贊^③等来告哀、詔以将作少監李璟
册祭之。

二、新伝

〔年月不明〕賛普死、以弟達磨嗣。

会昌二年、賛普死、論賛熱等来告、天子命将作監李璟弔嗣、無子、以妃蒯氏兄尚延力子乞離胡為賛普。

三、通鑑

〔開成三年〕是歲、吐蕃彝泰賛普(トチックデツェン)卒、弟達磨立。

〔会昌二年十二月〕丁卯、吐蕃遣其臣論賛熱、来告達磨賛普之喪、初吐蕃達磨賛普有倭幸之臣、以為相、達磨卒、無子、倭相立其妃蒯氏兄尚延力之子乞離胡、為賛普。

右の史料のうち第一の旧伝の文は、長慶会盟(八二一—八二二)の記事に引続き、二三の使者の往来を述べた後に書込まれているので、当然この賛普はチックデツェンでなければならぬ。而して旧伝にはダルマについてはこの後も何等記すところはない。ところが第二の新伝の文になると、長慶会盟の記事の後に、太和五年の悉怛謀の事件があり、それに続いてこの文が記されているから、このとき歿した賛普も当然チックデツェンであろう。而してその後はダルマが嗣いだのであり、従つて会昌二年(八四二)に死んだツェンポはダルマということになり、同じ年でありながら

死んだツェンポは旧伝のそれとは別人になる。その上注意すべきはこの二人のツェンポの交代は何時という年次が明かにされていないことである。第三の通鑑は編年体の史書であるからこのツェンポの交代を時期不明として片付けることはできない。通鑑はツェンポの交代を開成三年(八三八)に係け、ダルマの死はやはり会昌二年とするのである。これに従えばダルマの即位、死は八三八、八四二年となり、旧伝では全く触れず、新伝では不明にされた紀年は通鑑によつて一応確定されたごとく見える。少くとも中国史料だから判断するならば、この場合通鑑の紀年は最も確実で、旧伝は会昌二年の前にあるべきツェンポの交代を脱落したものとごとき見えるであろう。

ところがこのように考えて、前に述べたケーパーガトンの紀年と対照すると、中国側の記す年代とは余りにも相違があり過ぎて、何れが真実か我々は帰趨に迷わざるを得ない。従来諸学者の説が不一致であったのは全くこの兩國の史料の不一致に基いており、その間に何等かの調整を求めて一応の解釈を施したに過ぎなかつたのである。

この困難を打開するために、我々は漢文献の再検討、特

に通鑑の記事が一体何に基いてこの紀年を導き出したかを先ず吟味しなければならぬ。

通鑑の開成三年のツェンポ交代の記事については、司馬光の通鑑考異卷二十一開成三年の条には次のごとくいう。

彝泰贊普卒及達磨立、実録不書、旧伝、続会要皆無之、今補撰國史。

即ちチツクデツェンとダルマの交代は文宗実録、旧伝、崔鉉の続会要等にはなく、補国史のみによってこれを決定したというのである。しかし当時唐に対する最大の強国であった吐蕃のツェンポの交代を実録以下の書がすべて脱落するということがあり得るであろうか。八二一—八二二年の長慶会盟以来兩國の關係は平和そのものであり、「辺候晏然」(新伝)、「久不為辺患」(通鑑開成三年の条末尾)と記される程であったのに、ツェンポの交代を告げる使者の往来がなかったとは到底信ずることはできない。戦争状態のため通告の使者発遣が多少遅れたことはあっても、無通告であったことは少くとも吐蕃に関する限り一代を通じて一度もなかった。従つて実録に記載がないのはそういう事実がなかったからで、旧伝、続会要はそれに従つたまでであ

り、補国史にあったというその記載は何等かの誤で、少くとも係年を誤つたものではなからうか。

引続いて会昌二年十二月丁卯のダルマの死に関する通鑑考異卷二十一の文を見よう。

実録、丁卯、吐蕃贊普卒、遣使告喪、唐朝三日、贊普立僅三十余年、有心疾、不知國事、委政臣焉、命將作少監李璟、為弔祭使、拋補國史、彝泰卒後、又有達磨贊普、此年卒者達磨也、文宗実録、不書彝泰贊普卒、旧伝及続会要亦皆無達磨、新書拋補國史、疑文宗実録闕略、故它書皆因而誤、彝泰以元和十一年立、至此二十七年也、然開成三年已卒、達磨立至此五年、而実録云、僅三十年、亦是誤以達磨為彝泰也。

この文は分り難いと思うので、説明的に次に翻訳してみよう。

〔武宗〕実録の〔会昌二年十二月〕丁卯の条に、吐蕃のツェンポが卒したので、「吐蕃は」使者を遣し〔その〕喪を通告してきた。よつて〔唐朝では〕朝政を三日間停止し〔て哀悼の意を表し〕た。ツェンポは即位してから三十余年近く〔在位したが〕心臓を病んでおり、国政を摂らず、政治は大臣に委せきりであつた。〔朝廷では〕將作少監の李璟に弔祭使を命じ〔て行かせ〕た。

とある。補国史によると、チツクデツェンの卒した後にダルマツェンポが立っている。従つてこの「会昌二年」年に卒したのはダルマである。文宗実録はチツクデツェンの卒を記していない。旧唐書吐蕃伝及び続会要も亦ダルマのことは「書いて」いない。新唐書吐蕃伝は、補国史「の文」を信じてそれに拠り、文宗実録は疎略のために記載を欠いたのだと見ている。従つて「旧伝、続会要等の」他の書は皆「実録に記載がないということに」よつて誤られ、「チツクデツェンは元和十一年に即位し、この「会昌二年」年まで二十七年「間在位した」と考えたのである。しかしチツクデツェンは開成三年に已に卒しているから「ついで」ダルマが即位してからはこの会昌二年までは五年経つている。ところが実録には「三十年近く」といつているが、これも亦ダルマをチツクデツェンと誤つたからで「結局ダルマの時代をチツクデツェンの時代を含めてしまつたので」ある。

この文によつて司馬光の解釈は明瞭となる。彼は補国史がツェンポの交代を伝えているのを、実録以下の書に書かれていないために反て貴重な史料と考えた。而してこれを採つて開成三年にツェンポの交代があり、ダルマが立つたものと決定した。故にその後の会昌二年に死んだツェンポもダルマとせざるを得なくなつた。そこで右のように考異

において彼なりの解釈を示したのである。

ところで彼の引いた武宗実録の丁卯の条の「吐蕃のツェンポ」というのはもともと「贊普」とあるだけで、それをダルマと考えたのは司馬光の個人的な解釈である。又新伝は補国史を採つているにも拘らず、文宗実録に記載がないのはその疎略のためだとしてゐるが、新伝が果してこのとき補国史を全面的に信用したかどうかは些か疑わしい。既に補国史には開成三年という紀年があつたと思われるに拘らず、新伝はその紀年を明かにしていない。新伝はチツクデツェンに続くダルマの存在は確に信じていたのであろう。しかしその交代の時期については、実録その他に記載がないということと補国史の紀年を疑い、故意にそれを落したのではなからうか。

結論を急ぐために実録の検討から始めよう。現在我々は文宗実録も武宗実録も見ることにはできない。しかしこの書の内容はやはり史料としてはその価値は第一等のものであることは疑ない。それが考異の文によると、開成三年のツェンポ交代の記事を載せていないというのである。とすればチツクデツェンはこのとき死んだのではなく引続きツェ

ンポの位にあり、会昌二年に至つて歿したのが事実としかければならない。チックデツェンは元和十年（八一五）に即位し（古代史二七一―二八頁）、会昌二年（実は元年Ⅱ八四一）まで二十七年間位に在つた（後述）。さればこそ実録には「僅ほんどと三十余年」、新伝には「幾ほんどと三十年」在位したとあるのに一致するのである。開成三年（八三八）であれば在位は二十四年となり、「ほとんど三十年」の語感には程遠くなる。とにかく実録の記載はチックデツェンが会昌二年頃まで三十年近く在位したことを示し、途中にダルマ等の治世を挿込む余地は全くないのである。

更に実録に次ぐ重要文献である冊府を見よう。冊府卷九六六外臣部継襲には、吐蕃の王統を略説した文があるが、そのうちに、

天宝十四載、贊普乞黎蘇籠獵贊死、大臣立其子娑悉籠獵贊為贊普、貞元十三年卒、長子立、一歳卒、元和十二年、会昌二年、皆以贊普卒來告。

とある。この文の前半の批判は既に行つていたのでここでは述べない（古代史五八二頁）。後半の文は貞元十三年以後のツェンポの死去の通告を「皆」挙げてゐるが、やはり元

和十二年から会昌二年の間まではそのようなツェンポの交代はなかつたことを示してゐるのである。

これによつて我々は次のごとく断定できるであろう。新伝は補国史の記事に迷わされて些か躊躇しながらもダルマの治世をチックデツェンの治世の中に持込んだがために、会昌二年にダルマが歿したごとく記し、司馬光も補国史の記載を信じたがために、新伝以外の他の書はすべて脱落があるものとし、新伝と同様チックデツェンの末期数年間にダルマの治世を割込ませる誤に陥つてしまつたのであると。

三

ところで我々は中国文献におけるツェンポの交代を会昌二年と見なすことになつたが、それは果して絶対に正しいかどうか。成程武宗実録には「会昌二年十二月丁卯」にツェンポの死は報ぜられてゐる。しかしこの文を仔細に読むと、この日付は決してツェンポの死のものに係けられてゐるのではない。この十二月丁卯以前にツェンポは死し、吐蕃は使者を以てその喪を通告し、廢朝が三日行われた、而して将作少監の李璟が弔祭使となることを命ぜられたの

が丁度この日であったに過ぎない^⑨。このような一見誤解されやすい書方は中国文献の常習であつて他のツェンポの場合も殆どこれと変わらない。従つてツェンポの死そのものはこの日付より少しく遡らなければならぬのである。

ところで想起するのはケーペーガトンにチツクデツェンの死を辛酉の年(八四一、会昌元年)としてゐることである。

これで中国、チベットの両史料は完全に一致する。即ちチツクデツェンは八四一年に死し、多分翌八四二年(会昌二年)にその通告の使者は唐朝に到着し、同年十二月丁卯に李璟が弔祭使に決定された。右のごとく実録とケーペーガトン又はロギエチェンモの吻合は、もはや何人も動かすことのできない事実としてチツクデツェンの死が八四一年に係けられなければならないことを証明するであらう。

チツクデツェンの死は直にダルマの即位に繋がる。実録には、考異による限り、八四一のチツクデツェンの死は報ずるが、その後継者が誰であるかは何等述べるところがない。これに従う旧伝も前述のごとく後継者については黙して何も語らない。唯補国史のみが、ダルマが後を嗣いだことを述べ、それを新伝、通鑑は利用したのである。補国史

はダルマに関する係年を確に誤つていた。しかしこのことはダルマの存在を疑うことにはならない。係年は誤つたが補国史は正確にダルマが後継者であることを伝えたのである。而してそれはチベット側の文献とも完全に一致するのである。

さてそこでダルマは何年まで在位したかということであるが、この問題はもはや中国文献からは知ることができない。唯ケーペーガトンによつてのみそれを八四六年と定めることができる。しかしケーペーガトンのみでは些か心細いので更に二つの史料をこれに加えよう。

第一はギャボエの記載である。ギャボエの後期弘通の章には、ラルン・ベルギドルジェがダルマを暗殺したのを、明かに丙寅の年に係けており(CB, p. 285a)。この年は八四六年に該当するものである。

第二は有名な王統鏡の記載である。王統鏡はチベット王統を辿りながらその間に仏教が如何にこの国に弘通したかを述べる書であり、物語化している点も多いが歴史的記述も少なくない。トゥッチ氏の研究では一五〇八年以後に作られたものであり(TPS, p. 141)、相当後世の作ということに

なるが、その引用文献から見ると史料的价值は軽々には判断できない。ここに引用するのは、そのうちダルマが暗殺されたことを述べた条に、原註として (GR. p. 98b)。

王ランダルマは牛の年に生れたまゝ、鳥の年に王位に即ぎ、五年の間仏教を弾圧し、御年三十八歳経たる虎の年に弑せられたり。

とあるものであるが、この文は註として加えられたということで一見大して価値がありそうにも思えない。しかしその紀年の表示が十二獣環で、古代の風を保っているところを注意したい。鳥の年は辛酉(八四一)であり、それより五年後の虎の年は丙寅(八四六)で完全にケーパーガトン乃至はロギエエチェンモの記述に一致して、その古伝承の確實性を支持するのである。

唯この文で奇異の感に打たれるのは、ダルマが牛の年に生れ、三十八歳で歿したということである。丙寅の年から逆算すれば、牛の年は確に己丑(八〇九)となるが、それではロギエエチェンモに、前述のごとくダルマはチックデツェンより三年前に生れ、四十四歳で歿したというのに明かに矛盾する。ダルマがチックデツェンの兄であるか弟で

あるかという問題であるが、これについて少しく考えてみよう。プトンはダルマに関する記述において兄、弟何れともいっていないが、その父チツェンセナレグ Khri Ide btsan Sad na legs (チデソンツェンセナレグの誤) の項には、彼に五王子が生れたとして(古代史八六四頁)。

チデソンツェンレーパチェン Khri Ide sron btsan ral pa can
(チックデツェンレーパチェンの誤)

ゾアンマ Gtsan ma

チダルマウユムツェン Khri dar ma ju dunn btsan

ラジエフンドゥップ Lha rje lhun grub

チチンポ Khri chen po

の順にその兄弟の名を挙げている。これによればダルマは弟のごとく見えるが、プトンはチソンデツェンからダルマまでの王名を全部誤っている程であるから、この兄弟等の順位も正しく記しているものかどうかは疑わしい。又チベットの家系は兄弟の名を挙げるとき必ずしも長幼の順を正確には守っていないのを考慮に入れなければならない。それではテブゴンは如何かというに、カリカツツ Kha li Kha tsu (チックデツェン) の後を継いだものとしてその弟タムツツ Tha mu (ダルマ) を挙げている。ギャイグツァン

に扱った部分であるから漢音の直訳名が用いられているのであろうが、勿論これはチベット伝承ではなく、中国文献の記述の引写しである。事実ギャイグツァンの材料となつたと思われる新伝には「弟達磨嗣」と出ており（三七頁）、通鑑にも「弟達磨立」とあるところを見ると（三七頁）、弟という見方はやはり補国史に原因があるのであろう。

権威あるプトン、テブゴンにおける弟説が右のように信憑性の稍々薄いものであるとすると、兄説の方は相対的にその比重を重くしてくる。先ずテブゴンの材料になつたウラン史を取上げよう。

ウラン史は二か所においてダルマの名を出している。一か所はシナの王統を述べたところで、カリカチュ *Kha li Kha chu* が即位した後のこととして（RA. p. II b）、

丙辰の年（八三六、開成元年^①）にチベットの王は逝き、その年のうちに末弟ムツ *gcan po tha chun mu* といえるもの王位に即けり。

というが、末弟ムウ *Mu* はデンサハ本 *Gdan sa pa's Text* では *Damu* となつており、勿論この方が正しく、明かにダルマその人を指している。注意すべきはこの文で

ダルマが末弟と呼ばれていることで、如何にも意味がありそうなことである。しかしウラン史のシナ王統の部分は確実に新伝を材料としたギャイグツァンの記述に頼っている^②のであるから、ダルマを弟というのは新伝の記述をそのまま引いてきているに過ぎない。カリカチュとか *Damu* という呼び方が既に中国語そのものであり、従つてこの文は史料の価値はないものとせざるを得ない。

第二の箇所は同書のチベット王統の部で（RA. p. 18 b）、王（*チツクテツェン*）は御歳三十六歳、辛酉の年（八四一）に弒せられたり……王には御子なきにより、兄ランダルマ王位に即きたり。暫くは王者の慣習しきたりのごとく振舞いしが、大臣の罪行を好むもの等によりて変り、先に弟が王位に即きたることに心傷けられ、チベットにおける仏陀の教を弾圧せり。

とあり、今度は明かにダルマを兄として扱っている。ウラン史は結局一本の書の中で矛盾した記録を残したことになるが、著者のクンガードルジ *Kun dgah rdo rje* はそれを何れが正しいとも判定していない。著作者としては不用意であるとの非難は当然受けなければならないが、我々としては矛盾した記録をそのまま残してくれた著者に感謝

の意を表せねばなるまい。というのはウラン史は現在実物の存在する最古のチョエジュンの一つであり、この文はチベット古伝承としての価値が充分認められるからである。

この伝承の確実性を支持するために次にギャボエを見ることにしよう。ギャボエは一四九四年（弘治七年）に書かれたチョエジュンであるが、その内容は多分ギャイグツァンその他によつたものと推定される。これによると（G.B. p. 137b）

レーパチェンはチンデンツェンの生れてより七十六年経たる丙戌の年（八〇六）^⑩にウーシャンド *Pa gan rdo* にて生れられ、十二歳のときに諸大臣の会議によりて王位に即けられたり。政は二十四年間摂りたり。^⑪

とあり、八〇六年の生れであることが明かである。又その歿年は（G.B. p. 140 b）

御歳三十六歳、辛酉の年（八四一）に就せられたり。

とあつて、既に決定したツェンポ交代の年次と一致する。問題のダルマについては（G.B. p. 141 a）

兄ランダルマは癸未の年（八〇三）の生れなり。三十九年経たるときにチレー *Khi ri*（『チ・レーパチェン』）就せられて、彼王政を摂りたり。二年間王者の慣習のごとくなせしが、癸亥

の年（八四三）より御心に悪魔入り、大論ギェルトレタグナチン *Rgyal to re stag sna can* 等罪行を好む者等によりて〔態度〕変り、前に、弟の王政に就きしことに心傷けられ、チベットにおける仏陀の教を弾圧せり。三年半悪政をなし、四十歳丙寅の年（八四六）……ラレン・ベルギドルジ *Lha In Dpal gyi rdo rje* によりて王は殺され〔ルギドルジは〕逃れたり。

と述べ、彼が八〇三年の生れで、弟が先に即位したことを怨んでいた等、明かにチツクデツェンの兄であることを証明する。とすると先にプトンに掲げられた兄弟の名は、順位を正しく記したものではないことになるが、これについてもギャボエはチデンツェンの項に（G.B. p. 137 a）

王とロ氏 *Yon bo zhi* = *Hbro za nan po rje* と〔の間〕^⑫に御子あり。長はツァンマ *Tsan ma*〔ついで〕ダルパ、レーパチェン^⑬、フンドゥップ *Lhun grub* 等あり。うちツァンマは仏教を大に好み、ダルマは罪行を大に好みしかば〔兩人とも〕王位には即けられず。フンジ *Lhun rje* とフンドゥップは若くして逝きたり。

とあり、ギャボエ自体としては確実にダルマを兄と見なしているのである。

もはやダルマの方が兄であることは疑ないと思われるので、再び王統鏡の註の問題に返ろう。王統鏡の註は細字で本文の間に書込まれており、何人がその註を書いたかは明かでない。しかしそれはそれとして本文にこれに關聯する文を捜出してみよう。すると同書のチデソンツェンの事蹟を述べた項の次に (C.R. p. 94 a) .

長子ゾアント Gtsah. hna は佛法を好みて出家し、ダルマは罪行を好みて、王となるに適しからざれば、中子レーパチェンに國の支配は譲られたり。王レーパチェンは丙戌の年 (八〇六) に生れられ、御歳十二歳のとき父王逝かれたれば、王位に即けり。

とあつて、前掲のギャボェの文と紀年は全く同じく (四四頁)、又ダルマを兄と見ていることも疑ない。もし註の作者を王統鏡の著者自身とするならば、著者は本文と註と、何れを正しいと見ていたのであろうか。我々は恐らくは著者は本文の方を正しいものと見ていたと考えたい。その故に彼はダルマについての紀年を得たとき、それを真実らしい古伝承の一つとして棄て難い価値を見出し、これを著述の中に取上げたのであろう。しかしダルマの生年を牛年に

していることは従来 of の考えと矛盾するものであり、その故に些かの躊躇を以てこれを註として取入れたのであろう。或はこの註は著者の書入ではなく、後世の何人かの書込ではないかという疑もある。しかし何れにせよ古伝承の一つであり、ダルマを牛年生れとして扱つて弟にしていることだけは歴史的には誤としなければならぬ。恐らくこの牛年 (己丑、八〇九) はチツクデツェンの生れた三年後であり、ケーパーガトン等に明確に記されている「チレーより三年前の年」に生れたということから、三年前と三年後を取違えたのであろう。或は八〇三年に生れて三十八年目に即位したのを、その歿した年と誤り、逆算して牛の年生れとしたのかも知れない。今は何れとも断定はできない。

四

ところで一つ重要な問題が新に提起される。それはダルマが歿した後の中国との接壤地帯の状況の変化である。中国文献のうちダルマ歿後の青海、甘肅方面のチベット族の動向を述べているのは新伝と通鑑である。前にも触れたごとくこの両書はともに会昌二年にダルマが歿し、ついでチ

ム氏の系統の乞離胡がツェンポとなり、国民はこの異系への王の交代を納得せず、政局不安が起つて、洛門川討撃使の論恐熱 Blon khon bshar⁽¹⁾と鄯州節度使尚婢婢との抗争が勃発したことを述べている。両書の内容は略々相似たものであるが、唯新伝の方は大中三年(八四九)までその経過について紀年を全く書入れていないのに、通鑑はすべて事件に年月をはつきり書込んでいる。しかもそれが会昌二年から大中三年(八四九)まで散発的に連続して書かれている。とすればダルマの死を会昌六年にとる限り、二年から六年までの記事はどう解釈すべきであろうか。通鑑の係年の正確さは定評があり、この考えを以てすれば、やはり会昌元年にダルマは歿したのであり、それを六年まで下げることは甚だ困難なことになる。兩國の文献の紀年はここに正面衝突することになるが、中国文献の方が豊富な内容の裏付があり、それによってその信憑性は如何にしても大とならざるを得ない。この難題を解くために、新伝と通鑑の記事を対照し、その年代が正確かどうかを充分に検討してみよう。少し長くなるが会昌二年より大中三年までの新伝の記事を引用すれば次のごとくである。

「会昌二年、贊普死(乞離胡ツェンポとなり大相結都那殺さる)、別將尚恐熱為落門川⁽¹⁾討撃使、姓末、名農力熱、猶中国号郎也、誘詭善幻、約三部得万騎、擊鄯州節度使尚婢婢略地、至謂州⁽²⁾、与宰相尚与思羅戰薄寒山、思羅敗走松州、合蘇毗、吐渾、羊同兵八万、保洮河自守、恐熱謂蘇毗等曰、宰相兄弟殺贊普、天神使我率義兵、誅不道、爾屬乃助逆背国耶、蘇毗等疑而不戰、恐熱麾輕騎涉河、諸部先降、并其衆、至十余万、禽思羅縊殺之」⁽³⁾
「婢婢姓沒⁽⁴⁾、名贊心牙、羊同国人、世为吐蕃貴相、寬厚略通書記、不喜仕、贊普疆官之三年、国人以贊普立非是、皆叛去、恐熱自号宰相、以兵二十万、擊婢婢、鼓鑿牛馬糞它聯千余里、至鎮西軍⁽⁵⁾、大風雷電、部將震死者十余人、羊馬糞它亦数百、恐熱惡之、按軍不進、婢婢聞之、厚幣詒書約驩、恐熱大喜曰、婢婢書生、焉知軍事、我為贊普、以家居宰相处之」⁽⁶⁾
「於是退營大夏川、婢婢遣將厖結心、莽羅薛呂、擊恐熱於河州之南、伏兵四万、結心掘山、射書極罵、恐熱怒甚、盛兵出闕、結心偽北、恐熱追至数十里、莽羅薛呂以伏兵衷擊、大風雨河溢、溺死甚衆、恐熱单騎而逃」⁽⁷⁾
「既不得志、尤猜忍、殺戮部將、爰藏、豐贊皆降婢婢、厚遇之、明年恐熱復攻鄯州、婢婢分兵五道拒守、恐熱保東谷山、堅壁不出、爰藏諒以重柵、断汲道、旬日恐熱走薄寒山⁽⁸⁾、募散卒、稍至得数千人、復戰鷓鴣山⁽⁹⁾、再戰南谷、皆大敗」⁽¹⁰⁾

兵卒仍歲不解、^f「大中三年、婢婢、屯兵河源聞恐熱謀度河、急擊之、為恐熱所敗、婢婢統鏡兵扼橋、亦不勝、焚橋而還。」^(一五)

引用文註

- 〔一〕 註①に説明するごとく「論」が正しい。
- 〔二〕 甘肅省隴西県。
- 〔三〕 青海省西寧県。
- 〔四〕 甘肅省隴西県東南五里。
- 〔五〕 甘肅省隴西県西南。
- 〔六〕 四川省松潘県。
- 〔七〕 東チベットから青海チベットにかけての地帯にいたチベット系部族。位置並びに吐蕃との関係については古代史一三九頁、五一三頁参照。
- 〔八〕 没盧はロ氏・Lbroであるから確に婢婢は第一等の貴族出身である。
- 〔九〕 河州の西一八〇里にあつた。
- 〔一〇〕 河州の南にある。
- 〔一一〕 莽羅薛呂 nang là sít lwo (Man bla(ra) sher?)
- 〔一二〕 岷藏 g'iep dz'ang (Khri bzau)
- 〔一三〕 甘肅省臨夏県東南一五里。
- 〔一四〕 甘肅省渭源県西二五里。
- 〔一五〕 青海省西寧県西南。

右の文を通鑑の記事と合せて年代を入れると次の上段のごとき紀年となる。

- a — 会昌二年 (八四二) — 会昌六年
- b — " 三年 (八四三) 七月 — 大中元年七月
- c — " 三年 (八四三) 九月 — " 元年九月
- d — " 四年 (八四四) 三月 — " 二年三月
- e — 大中二年 (八四八) 十二月 — " 二年十二月
- f — " 三年 (八四九) — 大中三年

一見して奇妙に感ずることは会昌五年 (八四五)、同六年 (八四六)、大中元年 (八四七) の三年間の記事が全くないことである。洛門川から鄯州までの大して遠くもない距離の間で相当激烈な戦をしていながら、彼等はこの中間の三年間だけは休戦していたのであろうか。尤も通鑑には会昌五年十二月の条に係けて、

論恐熱復糾合諸部、擊尚婢婢、婢婢遣虜結藏、將兵五千拒之、恐熱大敗、与数十騎遁去。

とある。この記事は戦の場所も書いてなく、婢婢の側からは五千程度の部隊が出動した程度であるから、大した戦とも見えないようである。しかし前年の三月に戦って敗れたとはいえ、次の年の十二月まで彼は悠々として戦機を熟するのを待っていたのであろうか。洛門川と鄯州とに對峙していて二人の間にその余裕は果してあったのであろうか。

たとえこの係年が真実としても翌六年と大中元年の二年間二人の間の交渉は史上において全くブランクなのは如何なるわけであろうか。

我々はここに通鑑の編者が、年代並に記事に相当の作為を施しているものと断ぜざるを得ない。即ち通鑑は会昌六年のツェンポの死去を会昌二年に繰上げてしまっている。ところがもとの史料は会昌六年からしかないから如何にしても六年から大中三年までの記載を、会昌二年から大中三年までの間に配当せねばならなくなる。その結果、恐熱と婢婢との抗争を最初は適当な間隔で並べて行つたが、遂に史料に窮し、空白の二三年を置かざるを得なくなったのである。その作為の跡を次に辿つて見よう。

大中三年の戦は新伝、通鑑ともに年代が明確に入れてあるから問題は無い。遡つて大中二年の記事はというと、新伝ではe文のみが間違いない記事であろう。その前のd文は通鑑では会昌四年のことになっている。しかしこのd文のうちの「明年」とあるところからeの終までが、果して会昌四年三月から大中二年十二月まで足掛五年の戦の内容であろうか。私見を以てすれば、これは如何にしても一年

内の諸事件と見なさなければならぬ。恐熱が東谷山を保ち、炭蔵に包囲され、水道を断たれたのは三月であつた。而して旬日で恐熱は薄寒山に逃げ帰らざるを得なかつた。

ついで又兵士数千人を集め鷓鴣山に戦い、更に南谷に戦つたのは十二月であつたのである。ところで鷓鴣山の戦闘の記事は通鑑に全く現れていない。しかし新伝より記事の詳細な通鑑がこれを書かないというのも如何にも奇妙な話である。そこで右に引いた会昌五年十二月の記事が初めてここに生きてくる。両書の記事を対照して復原できる事實は、

恐熱が散卒を合せて数千人を得、婢婢を撃つた。婢婢は厖結蔵以下五千人を遣しこれを拒ぎ、鷓鴣山に戦い、恐熱は大敗した。

ということ、d、eの間の文は確実に通鑑の五年十二月の条に対応するのである。d、eはその間の文を含めて大中二年一年間の記事に相違なく、従つてdのうちの「明年」は大中二年を指したものとしなければならぬ。

続いてb、cの記事が登場するが、これは会昌三年七月、九月に係けられているから、大中元年の七月、九月と見るべきであろう。唯この際にも問題が一つある。通鑑大中元年五月の条に、

論恐熱乘武宗之喪、誘党項及回鶻余衆、寇河西、詔河東節度使

王宰、將代北諸軍擊之、宰以沙陀朱邪赤心前鋒、自麟州濟河、

与恐熱戰於塩州、破走之。

引用文註

〔一〕 胡注によれば代北は「涇嶺以北」の意味であるという。

〔二〕 綏遠省五原県。

〔三〕 寧夏省塩池県北。

とあることで、この事件は「武宗の喪に乘じた」という時期の上からも、又中国側の作戦である上からも、その紀年は動かすことはできない。とすれば恐熱は五月に、恐らく婢婢の側面を牽制するために河西方面に軍を動かしたが、塩州では不利であったため、直に七月には軍を鎮西軍、大夏川に集結し、九月に河州の南で婢婢と戦ったのであろう。この一連の作戦行動を大中元年のこととすれば、残る記事は当然会昌六年の事実となるが、これは先に定めたダルマの死の年に完全に一致する。かくして a-f の記事の係年は前掲の表の下端のごとく、殆どが年数を収縮変更されなければならぬのである。

思うに通鑑が恐熱の事蹟を検べるに当り、用いた材料に完全な紀年がなかったであろう。考異卷二二大中二年

二月の条には、

按国史叙論恐熱事甚詳。

といているから、或はこれがその基本的な材料であり、紀年も一応は書いてあったのかも知れない。しかし大中二年前以前の恐熱と婢婢との争は唐とは何等直接の關係なしに行われたものである。従つて国史は正確な紀年があつたところで、通鑑はそれをそのまま信用できなかつたであらう。何となれば通鑑自身が既にダルマ弔祭の使者派遣を会昌二年と定めており、眞実は会昌六年から大中三年までの記事が無理にも会昌二年から大中三年までの間に引伸ばし分割せざるを得なくなつていたからである。通鑑のこの間の紀年が決して信頼に価しないことはこれによつて略々理解できるであらう。

五

以上によつてダルマが八〇三年(貞元十九年)にチックデツェンの兄として生れ、八四一年(会昌元年)に即位、八四六年(会昌六年)に四十四歳で歿したことは確認されたと思う。ところで問題は例の廢仏の年次である。チベット文

獻では殆どそれは辛酉の年(八四一)に係けられ、或は即位と同時に廢仏が行われ、或は即位と廢仏と死去が同年であるとも考えられている。しかし果してそうなのであろうか。前掲のギャボエは、彼が即位後の二年だけは王者らしい立派な振舞であつたが、八四三年から大論のギェルトレ等に唆かされて反仏へと転じ、三年半悪政をなして獄せられたという(四四頁)。又その文の「即位後の二年」を「暫くは」と書變え、その他の年月を省いただけの同様の文がウラン史のチベット王統の部にも出ている(四三頁)。これらの史料によるとダルマはもとも反仏主義者であつたのかどうかも疑わしくなる。少くとも八四一年即位と同時に廢仏が始まつたとは考えられなくなるであらう。既にリチャードスン氏はこのことに関連して、敦煌文書のうちに、「ツェンポの御子ウイドゥムテン」 Btsan po lha sras Hbuhü düm btan (=ダルマ) についての祈願文⁸⁾があることを注意しているが(TIR. p. 76) 恐らくは初期の反仏的ならざりしダルマに關してでなければこのような祈願文が獻げられる道理がない。

又ダルマはチョエジエン類では、ランダルマ Gian dar

gpa と呼ばれることが多い。ランは「牡牛の(ことき)暴虐者」の意であるとは普通に行われる説明であるが、ケーパーガトンには (Pr. ja. p. 137a)

牛の貌のごとくにて、智恵少く、頑固なりし故に、臣下等はランダルマと名付けたり。

といつて、身体的特徴が牛に似ており、智能が劣り、頑固であるという意味で「牡牛のダルマ」とと綽名されたことをいつている。ダルマの妻子としてはオェスン Hot sun があつたことはチョエジエン類がすべて述べるところであるが、オェスはダルマの歿した翌年に生れており、在世中に彼が子を持たなかつたことは確である。ランという綽名はこれで見ると、彼が少しく薄ぼんやりで、頑なだつた事實を背景に、その風態が牛に似ていたところから起つたものらしい。いわば愛称とまではゆかなくとも少くとも悪称ではなかつたのである。ランに「暴虐者」の意味が付されたのは廢仏の実施によつており、後からの意味の変化乃至は付加であつて、俗説とするより他はない。

尤も新伝には、

達磨は酒飲で、狩狐を好み、内籠が多かつた。且つ残忍で恩恵

を施すことが少く、政治は益々乱れた。

といつて、ダルマを申分ない背徳の君主として描いている。当時の唐蕃関係からいえば、中国がツェンポを悪党に仕立てなければならぬ事情はないから、この文は一応客観的記載のように見える。しかし中国の文献で亡国の君主が先ず悪徳者に仕立上げられなかった例は殆どない。吐蕃一代を通じて十人に近いツェンポの名が唐史には現れるが、それらについての性格的な描写は全くない^⑥。唯ダルマだけがこのように正確に描かれるという筈はない。亡国の君主が欠点の多い人物であることは確であろう。しかし無能であつても必ずしも悪徳であるとは限らない。我々は新伝の記載をそのまま客観的事実として軽々に受取ることにはできないように思う。ダルマは本来の反仏主義者ではなく、周囲の事情に動かされて八四三年に至つて初めて廃仏を断行したと考えられるのである。

又ダルマの時代の大論ギェルトン Rgyal to re についても問題がある。ギェルトレはチツクデツェンを絞殺し、ダルマの時代に入つて大論となり、廃仏を教唆した奸臣と云うのが従来の定説である。別名をバーのタグナチェン

Dbañs stag rna can (虎の耳持であるもの) と呼ばれるが、

ケーパーガトンはこれについで (Pt. ja. p. 134a)

バー氏 Dbañs の青年にて、猿のごとき頭、虎のごとき縞模様を耳に持ちたるバーのギェルトレといへるものあり。

というから、或は特異な耳を持っていた故にこのように称されたのかも知れない。それにしても如何にも悪党じみた風貌で、チェエジェンによつては、彼をギェルトレタグナチェン等と呼ぶのもあるが、果して奸佞の徒と簡単に考えようものかどうか。

敦煌文書の宰相表を見ると、彼の名はバーのギェルトレタグニャ Rgyal to re stag sha であつて(古代史六九七頁)、タグナチェン等とは書いていない。その特異な風貌故に綽名をタグナチェンと称されたことはあり得るかも知れないが、それが本来の悪称であつたとは考えられない。右のケーパーガトンの文は、彼が青年時代からこの綽名を持っていたことというが、彼の青年時代はチツクデツェンの時代であつて、ダルマの時代ではない。事実青年の大臣を必要とするような時代ではなく、又青年で大論になれる程バー氏は第一等の貴族ではない。とすると彼の綽名は、彼が大

論となり廃仏を勧めたときからのものではなく、余程若いときからのものと考えざるを得ない。反仏主義者として悪党的な意味がその諱名に含められたのはやはり廃仏以後とせざるを得ないであろう。

以上述べたことを基礎として、ダルマの即位から弑殺までを考えると次のごとくなる。チデソソツェンが歿したとき、その五人の子のうちから後継者は選ばれることになった。長男ゾアンマは出家していたので問題にならなかった。

次男のダルマは少しく智能が劣っていたので失格し、結局三男のチツクデツェンが後を継ぐことになった。しかしチツクデツェンは心臓を病んでおり、政治は大臣に委せきりで自らは宗教的行事に力を注いだ。仏僧を信頼すること厚く、大臣のうちには僧侶をも加えていた。仏教は宮廷の保護で盛になったが僧侶の勢力もかなりに伸びた。八四一年にツェンポは歿したが、その弟等二人は既に世を去っていたので、残るところは兄のダルマだけであった。王位に即位したダルマは最初の二年間は王者らしく振舞って何等問題はなかった。しかし恐らくこの二年間に僧侶特に政治に携っていた僧侶と保守的貴族の間には権力闘争が熾烈に行わ

れた。それによって貴族層は二派に分裂した。それはダルマの能力ではもはや如何ともし難いところまで進み、遂に八四三年に保守的貴族側はダルマを籠絡し、大々的な廃仏に踏切った。その結果僧侶側からベルギドルジエが出て、遂に八四六年ダルマを暗殺した。暗愚なダルマには政治の手加減とか駆引の手管等というものはなかった。彼は結局先代のチツクデツェンの播いた種を刈取る犠牲者の役目を背負わされたのである。

最後に右に取上げなかった二三のチュエジェンに記載されているダルマの年代を一瞥しよう。

第一にドライ仏教史である。この書は一般に年代の記入が頗る乏しく、紀年研究には好材料とはならないが、ダルマに関するはその傾向は明瞭に認められる。即ちその事蹟については他書と同程度の量を持ちながら、年代の記載については何等施すところがない。唯関聯事項は、レーパチェンが、「癸酉の年 chu mo bya に弑せられた」ことがあるだけであるが (V.D.L. p. 44a)、癸酉の年は、八四一年前後に求めれば八五三年より他はない。しかし八五三年では、この頃は古代王朝が崩壊した後であるから問題になら

ない。恐らく癸酉は辛酉 *Icags mo bya* の誤と考えられるが、このような重大な年代の誤は第五代ダライの権威にも拘る失敗といわざるを得ない。バクサムジョンサンはその年代集成のところにダライ仏教史を引いているが、それには癸酉を辛酉と書換えている (PSJZ. p. 156)。多分バクサム著者はダライ仏教史の誤を完全なケアレスマスタークと見なしたからであろう。

第二はバクサムジョンサンである。バクサム年代集成の項では、それまでのチョエジョン類の紀年を丹念に掲げ、最後に自らの調整案を出している。それには (PSJZ. p. 157)、

レーパチュンは丙戌の年(八〇六)生れにて、丁酉の年(八一七)から王となりたるも、丙辰の年(八三六)に弑せられたり。ラ
ンダル(マ)は癸未の年(八〇三)生れにて、「ついで」君主
となりたるが辛酉の年(八四一)に殺されたり。

とあり、明かにテブゴンのシナ王統の紀年に従っている。しかも遺憾なことには、両王の生年を除いては他は全部誤っており、問題にならない。

第三はその書かれた年代からいえばバクサムの前に来るが、有名な蒙古源流 *Erdeni yin tobči* である。この書が

王統鏡の系統を引くであろうことは従来屢々説かれたところである。書込まれた諸事件について著者サガンセチュン *Sayang sečen* は丹念に干支を以て年代を入れている。シュミット *I. J. Schmidt* はそれに西暦を併記しているが、彼は当然のことながらチョエジョン類が、廃仏の辛酉(八四一)とアティシャの入藏(一〇四二)の間に六十週年を一回脱落しているのを知らなかった。従ってその逆算は、

ダルマの出生 癸未(八六三)

即位 辛酉(九〇一)

死 乙酉(九二五)

となるが、勿論これらに従うことはできない。しかしシュミットの西暦換算を誤とし、年代を更に六十年遡らせて八〇三、八四一、八六五年としたならばどうか。前二者はチベットの古伝承に一致し、真実を伝えていることになり、死の八六五年だけが誤っていることになる。サガンセチュンがこの八六五年を何によって導き出したのかは不明とする他はないが、或はシュミットがよく利用しているボディメル *Bodhinār* 等にこの謎を解く鍵があるかも知れない。結論は次のごとくなる。チベットの古伝承はもともとダ

ルマの在位年次について正確な事実を伝えていた。一方唐側も前代のチツクデツェンについては確実な紀年を持つていた。しかし中国側で唐史を編纂するとき、補国史に誤られてこの二代の紀年を混乱させてしまった。そしてこの混乱した紀年がチベット側に持込まれ、更にチエジュン類の記述を混乱させた。この場合混乱の責任は明かに中国側文獻にあり、チベット側は被害者の立場に立たされている。しかしチベット史家にはその誤が最後まで意識されず、混乱はそのまま持越されて現代の史家まで及んだ。それは種種に論議されながら最初の出发点の誤が最後まで発見されなかつた稀な例の一つとなるものである。

- ① B.A. Introduction, pp. vii, xix, p. 47. 古代史三六頁。又佐藤長「チベット古代史研究の一問題」『古代文化』第九卷一頁一二頁。
- ② サキャバのラグバギェンツェン（一一四七—一一二一六）は筆者未見であるが、リチャードスンの説くところに従つておく（T.H.R. p. 67）。
- ③ ケーペーガトンの史料の価値はトゥツチ氏によつて唱導されてから諸家の認めるところとなり、これによる研究の進歩は量り知れないものがある。例えばトゥツチ氏はケーペーガトンからチソンデツェンの詔勅二通、チデソンツェンの詔勅をローマ

ナイズして紹介し、これを利用して古代チベット仏教の劃期的な研究を出した（T.H.R.）。又私もこれにより古代史の重要問題を種々に検討した（古代史）。最近はりチャードスン氏がダルマ王の紀年問題でこれを利用してゐる（T.H.R.）。パーウオの略歴及びケーペーガトンについては古代史八六頁註①を参照されたい。

- ④ クトンの略歴はテブゴンに出ている（B.A. p. 93）。
- ⑤ ロギエエチェンモはケーペーガトンに引用されている内容及び著者の生存年代から考えて、ダルマ死後アティンヤ入藏までの空白を埋めるのに重要な史料を提供すると思われる。これを採し出すのは学界の急務であらう。
- ⑥ 論贊は新伝の論贊熱が正しくBlon brtsan bsher と還元される。通鑑、冊府の論贊熱も誤であらう。
- ⑦ 悉怛謀の事件の処理には牛李の党争が絡んでゐた。前に私はこれを太和五年（古代史六一三頁）又は太和六年とし（古代史六九六頁）、矛盾した記載を残したが、礪波氏の研究によれば太和五年が正しいという（礪波護「中世貴族制の崩壊と辟召制——牛李の党争を手がかりに——」『東洋史研究』卷二十一巻三号五頁）。
- ⑧ チソンデツェンの死は貞元十三年（七九七）であつたが、その正式の告哀使が到着し、唐側の哀悼の使者が発したのは貞元二十年（八〇四）であつた。この間は困境で劇烈な戦闘が繰返されており（古代史五八六頁）、これが通告の遅れた原因であつた。最も遅れたのはこの例だけで、他はすべて一二年以内

に使者が到着している。

⑨ 冊府卷九八〇外臣部通好には、

武宗会昌二年十一月、吐蕃贊普卒、遣使論普熱入朝告哀、遣
將作少監李景入蕃弔祭。

とあるが、十一月はやはり十二月の誤と考えられる。会昌二年
の十一月には丁卯の日はない。又「論普熱」は註⑥に述べたごとく
論普熱の誤、「李景」は李璟の誤であらう。

⑩ ギャイグツァンは新伝から直接作られたものではない。正確
にいえば、ギャイグツァンの材料は通鑑長編であり、これに新
伝が参照されているということである。詳細は別稿で述べる。

⑪ 丙辰の年開成元年にチツクデツェンが歿したという記録は如
何にも奇妙である。何となれば、この書の材料は週れば漢文獻
であるにも拘らず、漢文獻にはこの年にツェンポの交代があつ
たとする記事は一切皆無だからである。或は開成三年が転写の
際に元年と誤られ、それが丙辰の年としてギャイグツァンに定
着せしめられたのであろうか。ウラン史を引いているテブゴン
も勿論同様の年代を記している (BA. p. 52)。しかし何れにせ
よこの紀年は歴史的事実ではない。

⑫ ギャポエ自体のうちに、重要事件の年代を教えたところ
(GB. p. 69 a)。

癸亥 (一二六三) より丙戌 (一四〇六) まで算うれば百四十
四年過ぎたり。それより現在の甲寅 (一四九四) 八白中央に
ありし年まで八十九年過ぎたり。

とあるので、この書の著作年次は一四九四年即ち明の弘治七年

と確定できる。

⑬ ギャポエはチソンデツェンの誕生を庚午の年として、
(GB. p. 121 b) 丙戌の年 (八〇六) から七十六年逆算すれば、
庚午の年は七三〇年となる。しかし敦煌文書吐蕃年代記によれ
ば、チソンデツェンの生年は確実に馬の年七四二年である (古
代史五〇六頁)。

⑭ 十二歳での即位は誤で、十歳が正しい。何となれば彼の即位
は八一五年が正しいからである。従って二十四年の在位とある
のも二十七年の誤である (四〇頁)。

⑮ 女性の名にマンボジエはおかしい。敦煌文書吐蕃王統記によ
ればチツクデツェン、ダルマの母はロ氏ラーギェルマンモジエ
Fbro za lha rgyal man no rje とあるから (古代史八二五
頁) マンモジエが正しい。

⑯ 後文によればフンジエ Lhun rje が当然ここにあるべきであ
る。ケーペーガトンではフンジエはラジエ lha rje と書かれ
(PT. ja. p. 131 a) フトンはこの二人を一人と見なしラジエ
フンドゥップとし、他にチチンポ Khri chen po を加えてゐる
(古代史八六四頁)。他の書は一般にケーペーガトンと同様で
ある。

⑰ 次に引用する新伝には尚恐熱とあるが、論恐熱が正しい。新
伝には姓末とあり、私は前にラウファー Barthold Laufer に
従い「末」はバル Hbal であろうとしたが (古代史七〇七頁註
⑨)、今ペー Dbais と訂正したい。ケーペーガトンに、ダルマ
死後に下カム Mdo khams で反乱を起した者にペー・コシエ

ルンテン Dbañs kho bsher legs ston があり、それよりロ氏 Phro' ノー氏 Sbas (= Dbañs) の抗争が続いたというから、バー・ロシキルはバーのロンコンシキルと同一人であろう。ロ氏は勿論この際尚婢婢の本姓没盧氏(本文引用新伝参照)を指すものとしなければならない。尚リチャードソン氏はチモンシキンの詔勅 (PT. ja, p. 130 b) に盟誓者として出てくるバー・トムシキル Dbañs khrom bsher を同一人と見てゐるが (TIR, p. 72) 綴字が異つてゐるから無理である。

⑮ Lalou, M., Inventaire des documents de Touen-Houang, vol. I, Nr. 134, Paris, 1939.

⑯ 尤もンシキンガムボが文成公主を河源に親迎したとき、大國の威容を見て俯き或は仰いで恥じてゐたとか(古代史二七八頁)、韋倫がチンモンキシキンに会ったとき、シキンは喜んで真觀以来の勅書を自ら取出してきて見せたとか(新伝)の記録があることはある。しかしこれらは皆素朴な遊牧民君主の一時の感情的表現を画つたものではあつても、その個性を明かに示したものはなから。

⑰ ダライ仏教史は、チモンシキンノムンチキンなる名を以て「シキンボを呼んでゐるが(VDL, p. 42 a)」と云つてゐるがチンクチンシキンノムンチキンの誤りである。

⑱ Schmidt, I. J., Geschichte der Ost-mongolen und ihres Fürstenhauses verfasst von Saanang Setseten, St. Petersburg, 1829, p. 49.

〔略語表〕

新伝 = 新唐書卷一四六下、吐蕃伝下
 旧伝 = 旧唐書卷一四一下、吐蕃伝下
 通鑑 = 資治通鑑
 冊府 = 冊府元龜

古代史 = 佐藤長「古代チベット史研究」上・下、京都、昭和三十三年。

年代基準 = 中根千枝「チベット史における年代基準の決定について」東大東洋文化研究所紀要第五冊。

王統鏡 = Bsod nams rgyal mshan, Rgyal rabs gsal bahi me lon.

ダライ仏教史 = 'Nag dbah blo bzani rgya mtsho, Rdsogs ldan gshon nu dgañ ston.

ウエン史 = Kun dgañ rdo rje, Hu lan deb ther.

キヤボキ = Rgya bod yig tshan.

ノムン = Bu ston gyi chos hbyun.

チンモン = Gshon nu dpal, Deb gter snon po.

カーヤードン = Dpañ bo gtsug lag hphren ba, Mikhas pahi

dgah ston, edited by Lokesh Chandra, New Delhi, Pt.

I, 1959, Pt. II, III, 1961, Pt. IV (ja), 1962.

BA = George N. Roerich, The Blue Annals, Calcutta, Pt.

I, 1949, Pt. II, 1953.

GB = キヤキ

GR = 王統鏡

PSJZ = Pag Sam Jon Zang, edited by Sarat Chandra Das,

of the small clans “in the second group” realizing the clan’s opinion through them and growing to the anti-Shogunate faction.

On the Reigning Period of King Dar-ma of Ancient Tibet

by

Hisashi Satô

There have been many opinions about the reigning period of king Dar-ma, such as Petech, Tucci, Aoki, Nakane, Richardson, and so on; each of which is wrong or unsatisfactory, because of many kinds of description in the Chinese and Tibetan literatures which were used for its researching. The essential reason, as the writer thinks, is as follows; the mistaken description in the *Pu-kuo-shih* 補國史 was adopted in the *Hsin-t'ang-shu* 新唐書 and *Tzu-ch'ih-t'ung-chien* 資治通鑑 and introduced into the Tibetan resource as it was. It is right to consider that the reigning period of king Dar-ma should be 841-846, and the time of that famous abolition of Buddhism should be in 843. Though the king was said to be a tyrant, as his intellect was low, he might be made use of by the anti-Buddhism faction, drawn into the struggle for power between anti- and pro-Buddhism in the court.

Men's Head-gears in the *Han* 漢 Dynasty

by

Minao Hayashi

There are many pictorial and sculptural materials as an important researching source on the community, economics and daily life in the *Han* 漢 era. When we try to use them as a material of our historical study and consider the expressed content, it is essential for us to judge the position and occupation of the expressed persons in them; especially headgears are to be its chief standard. The writer, according to the description of “Treatise